教団新報

定　価　1部220円（本体200円〒共283円）
予約購読料　1年分　〒共　3,962円
紙代のみ　3,080円
振替 00140－9－145275
本紙を購読ご希望の方は、前金をそえて、お近くのキリスト教書店へお申し込み下さい。
教会の購読料は負担金に含みます。

発行所　日本基督教団
169-0051　東京都新宿区西早稲田2-3-18
日本キリスト教会館内　電話03（3202）0546
FAX03（3207）3918
URL http://uccj.org
発行人　網中彰子
編集主筆　嶋田恵悟
印刷所　株式会社きかんし

2025年度 新任教師オリエンテーション

祝福を携え、伝道に励もう

新任教師26名が参加

6月23～25日の日程で、静岡県熱海市にある「ハートピア熱海」を会場に「2025年度新任教師オリエンテーション」が開催された。参加者は対象となる新任教師が26名、これに加えて教団三役、総幹事、各神学校教師、講演担当者、担当幹事、担当職員、7名の教師委員を加え総勢47名であった。

今回はこの4月より全国各地の教会に派遣された教師たちのみならず、学校に働きの場を与えられた教務教師も多かったことが一つの特徴としてあげられる。

一日目、福島純雄教師委員会委員長による開会礼拝をもって始まる。共に賛美歌を歌い、教団信仰告白を唱和した。士師記7章1～4節を通して、「教師としての現場での戦いは教師であり続ける戦いでもある。その際、自分の持てるもので務めを果たすのではない。非効率でも無駄が多くても神さまに示されたところに仕えていくものである」と伝えられた。

最初の講演は「伝道を共に担う教団の教師」と題して雲然俊美教団議長より教団の教師であるアイデンティティを確認して欲しいと語られる。また「主の再び来たりたもうを待ち望む」のが教師の務めであるというのも、参加者の耳を開かれたところ。自らの伝道であるよりも、神さまのなさることに信頼し、期待していく。その神さまの御前に愚直に、汗を流し、涙を流し、血を流していくような伝道者であってほしいと語られた。また参加者との質疑応答のやりとりで、教団は多様性の中の一致ではなく、一致ゆえの多様性なのだということも確認された。

続いて関谷直人同志社大学神学部教授より「ハラスメントと教会」と題してのレクチャーを受ける。教会にあって信徒と教師という立場の違いに起因するハラスメントは他人事ではない。全信徒祭司制を掲げるわたしたちであっても力関係があることの自覚が肝要であると伝えられた。

夕食後は「交わりのとき」として、参加者がお互いを知り合うプログラムが用意される。講師の話を聞き続けてきた皆さんが、互いに自己紹介しあう。会場全体が、わいわいガヤガヤと参加者の声に満たされる。またみ言葉をジェスチャーによって伝えていく伝言ゲームでは、み言葉を伝える難しさを体験。その難しさも参加者お互いを近づけることとなった。

二日目の朝礼拝を担当したのは教団書記の黒田若雄牧師。ヨハネによる福音書14章25～31節より、イエスさまの「平和を与える」という一言を聞いた。自身の体験から、世が与えるような安心と異なり、むしろ困難のなかに平和がすでに置かれているというイエスさまの語りかけが聞こえてきたことが証しされた。

朝食後「日本基督教団の教師として歩む」と題して菅原力教師養成制度検討委員会委員長による講演。教団の教師であるという自覚、教団の教師となっていくことに自覚的であって欲しいという呼びかけのもと、教憲前文の丁寧な解説がなされる。その解説は語彙や内容理解を深めるということを越えて、公同教会へと神が召してくださったことに思いを馳せる福音的な言葉として語られた。「公同教会を体験的に理解していただき、また虚心に信じて教会形成に励んで欲しい」と勧められた。

その後のグループ別懇談会ではお互いの教会での働きや課題を話し合う。互いに神に召された教師であるという信頼のもと、現場での悩みや戸惑いなどもそのままに語らうことができた。

二日目午後は自由時間として熱海の街をそれぞれに散策し、夕食後は「教団の取り組み」と題して「能登半島地震の報告」を内城恵教師委員より、「教団の機構について」は網中彰子教団総幹事より、「部落解放センターについて」を上野玲奈部落解放センター主事より聞く。教会の体としての具体的形、働きに思いを馳せる一時とされた。

三日目の朝は藤盛勇紀教団副議長によって朝の礼拝が捧げられる。使徒言行録1章3～11節よりみ言葉が取り次がれ、「聖霊のお働きのなかにある皆さんは大丈夫」と熱く説教がなされた。続く牧会講話は山北宣久田園調布教会代務者より聞く。「伝道・牧会は忍耐」、「羊の臭いのする羊飼いになりなさい」、「イエスさまの副牧師であることを忘れるな」など印象的な言葉を示しながら、若い伝道者に語りかける84歳の現役牧師に一同励ましと慰めを与えられた。

プログラムの最後に全体の振り返りのときを皆で持つ。口々にこの会での出会いと学びを受け止め伝道に励んでいきたいという言葉が聞けたのは感謝である。

閉会礼拝では清藤淳教師委員会書記よりルカによる福音書24章44～53節からイエスさまの祝福のうちに励んでいこうと伝えられプログラムは閉じられた。それぞれが祝福を携え、伝道に励まれるよう祈りたい。

（清藤　淳報）

▼教師委員会▲

戒規諸規則運用に関して意見交換

「新任教師オリエンテーション」が開催された6月23～24日の期間中、第3回教師委員会があわせて開催された。

始めに今回の新任教師オリエンテーションのプログラムおよび担当者、出席者の確認をすることから始めた。また2026年度の新任教師オリエンテーションの日程、会場も決定。2026年6月22～24日、今年と同様ハートピア熱海を会場に行うこととした。

8月25～27日、関西セミナーハウスを会場に行われる「第6回教師継続教育研修会」についてはプログラム、担当者の確認、現在の申し込み状況などが確認された。現段階での申込数が少ないことを受け、教区を通して再度参加呼びかけをすることとした。

また「戒規適用申請に関する件」を取り扱う。委員長より戒規諸規則運用に関して公明正大であることが必要という委員長の見解を踏まえ意見交換をする。戒規申請の内容は個別の事情を含むこともあることから、委員長の見解は参照しつつも個別に判断していくことが確認された。

また前総会期より、ある教区から提出されている戒規申請についての取り扱いについて議論した。必要な書類が提出されていることなどを改めて確認。また当該教区の意志も再度確認し、これを受理することを決定した。加えて一件の戒規解除願いが出ていることを受け止め、必要な手続きを進めることとした。

また無任所教師の現況について事務局からの報告をもって確認した。無任所教師は把握されている限りで660名を数える。教規128条⑤に基づく整理を行うことを確認し、別帳への移行について検討していくこととした。

そのほか各神学校訪問予定の確認、また教師養成制度検討委員会との懇談のときを持つことなどが確認された。

（清藤　淳報）

荒野の声

一昔前、「一神教は不寛容」という言説を度々耳にした。背後には「多神教である日本は寛容」という主張が込められていた。当時、世界で頻発していた原理主義に基づくテロとは無縁であった日本社会において、一定の説得力を持って受け止められていたように思う。▼しかし、寛容の精神が、欧州での近代化の中で、幾多の争いを経てもたらされた宗教和議や寛容令によって醸成されて来たと受け止めている者にとっては、少々乱暴な主張のように感じられた。また、多神教であっても、等しく不寛容に陥る可能性があるにも関わらず、自らの問題として受け止めようとしない姿勢に危うさも感じた。▼昨今、日本においても自国ファーストを掲げる政党が支持を集め、ネット上には排外主義的な言説が溢れている。もともと無自覚であったが故に、むき出しの不寛容が蔓延しかねないのではないかと危惧せざるを得ない。▼「寛容」（tolerance）という言葉は「忍耐」をも意味する。「寛容」を、ただ自己評価として主張するのではなく、事実、異なる者と認め合う時に必要な忍耐に生きる愛の業として受け止めることが求められているように思う。

ミャンマー地震報告　複合的被害への支援、その継続を

上から、路上での避難（アトゥトゥからの救援チームの撮影）、教会の庭にテントを張って野宿避難する人々、物資配布の様子（発災1ヶ月後）

ミャンマー中部で起こった大地震に際し、日本基督教団諸教会からも、アトゥトゥミャンマー（アトゥトゥとは「共に」という意味を持つビルマ語です）への多額の献金が寄せられていますことに、心から感謝しています。

ミャンマーの現状では、地震被害からの「復興」には軍事暴力の廃絶が必須です。空爆の停止、民主化に向けた大きな変更がなければ、市民が生活困窮から免れることは実現しません。

2025年3月28日正午ごろにミャンマー中部、ザカイン市内を震源とする最大震度7の大地震が発生しました。2021年2月の軍事クーデター後、軍による壮絶な空爆と焼き討ち、マイノリティへの迫害、民主化運動に参加する人々への弾圧が続いています。15人に一人が移住、失職する状況下です。複合的に困窮する人々が、地震の「被災者になる」ために、「反軍」ではないこと、移住者ではないこと、「純粋な」地震被災者である証明を要求されます。恒常化する軍の攻撃と自然災害は絡み合って人々の生活を襲っています。

地震では、3,700人以上が死亡、負傷者5,000人以上というのが、クーデター軍による発表です。しかし、支援活動をしている人たちは、この数字は信じられないと言っています。クーデター軍は古い住民票に基づき被害を調査、発表しているため、実質被害者数は数倍に及ぶと言われています。まだ収容されていないご遺体があるそうです。

アトゥトゥミャンマーは2021年2月1日、ミャンマー軍事クーデター直後から続けられている「ミャンマーを覚える祈り会」を礎に形成されたキリスト者中心のミャンマー支援に特化したグループです。

発災当日、パートナー団体や現地教育機関からすぐに連絡がありました。軍事クーデター後4年以上が経ち、毎月、日本の諸教会から託された献金を、最も困窮している人々への支援をと話し合いながら進めてきたその信頼とノウハウが生き、阿吽の呼吸での災害支援が当日からスタートしました。

発災直後の緊急支援として、①物資配給への資金提供、②活動メンバーの移動費と活動にかかる費用、③倒壊した教会建物で再建を余儀なくされているところへの献金、④地震及びクーデター後の空爆など複合的な被害に遭っている人々の生活支援、⑤地震被害のために支援が止まっている北部地域のIDP（国内避難者）のための仮設住宅の建設費用を行うこととなりました。

4月～7月までのアトゥトゥミャンマーへの献金は合計7,392,344円、そのうち600万円はすでにミャンマーに届き、今後も送金が続きます。是非、継続支援にご参加ください。

《ミャンマーを覚える祈り会》

◎毎週金曜日　午後9時（ズーム）
◎ミーティング ID: 835 4339 0368
◎パスコード: 540189
（活動の報告、現状報告もこちらで行っています）。

（渡邊さゆり報／アトゥトゥミャンマー共同代表・日本バプテスト同盟駒込平和教会牧師）

能登半島地震報告《ボランティアから》
祈りと共になされる小さな作業

「能登半島の被災地復興は遅れている」、地震発生以来、しばしば耳にします。でも、現地で生活している私たちには、少し違和感のある言葉でもあります。山面が道路ごと崩落した場所では、地震前は砂浜であった場所に数キロにわたって仮設の道路が通されました。一方で地震が起きた2024年1月1日のまま、まるで時間が止まったように全く手がつけられていない場所、家屋が解体され、更地のまま草に覆われている場所が今も至るところに残されている。目に見える光景だけではありません。生活の基盤と生業そのものが失われ、心の置き所が大きく変わってしまった。

上＝一人用テントでの宿泊
下＝学生ボランティアの活動

能登半島に暮らし、里山での生活を大切に思い受け継いでこられた方々にとって、受け入れがたいコントラストが、日々、打ち寄せる波のように寂しさと不安をかき立てる。言葉にすることは難しい複雑な感情が今も被災地には残されています。

1年半の時をさかのぼりますと、日本基督教団は、1月の5日には現地に使節を遣わしてくださいました。実際に被災地支援を経験された方が、個別に教会を訪問し、現地の状況とニーズを丁寧に確認し共に祈ってくださったのです。その際、牧師と共に私たちが2007年に起きた能登半島地震の後、全国の諸教会、兄妹姉妹方、教友、団体からご支援を受けたこと、いつか私たちが神様から与えられた、くすしき恵みに、信仰と感謝をもってお返しが出来るように、時間をかけて備え、祈ってきたことをお伝えしました。

折しも3月には、有事の防災拠点になるように設計され、災害備蓄もあった富来（とぎ）伝道所（羽咋教会の礼拝所）の断水が解消し、北陸学院とその支援活動に合流する学生方の宿泊、休憩施設として用いられていたこともあり、4月からは、わたしがボランティア支援のための現地ガイド（コーディネーター）を引き受けることになりました。現地での準備、調整、安全確認を経て、8月以降、冬期をのぞく月2回の派遣（3泊4日）を基本に、日本基督教団派遣ボランティアが実施され、今日に至ります。

毎回の参加者は少数で、一応の定員である8名をこえることはほとんどありません。何回かは、ひとりの参加者に現地ガイドが同行、また羽咋教会の教会員や石川地区の牧師、教会員が加わって行われることもありました。毎回3泊4日のプログラム中、前後2日は移動日に設定し、実質2日間がワークになります。

2024年度は、主に建物が裂けるように全壊してしまった輪島教会でのワークと、避難、入院のために地震発生以来、ご自宅に戻ることが出来ないでいる教会員ご夫妻宅の清掃と片付けを行いました。毎週の礼拝に用いられていたオルガンや長椅子、什器を運び出し、瓦礫や建材が散乱した解体前の建物内を清掃し、礼拝堂を整えるお手伝いが出来たことは幸いでした。冬があけ、新しい年度を迎えてからは、主に奥能登の珠洲市で発震当初から継続的な支援活動を担ってきた〝ボラキャンすず〟に参加し、地震と豪雨の被害を受けた地域、住民の方々のお手伝いをしています。

大がかりなことは出来ません。それでも、地震でご家族を失った方が家族で親しんでいたお庭を大切に整え、生まれ育ったご自宅から汚泥をかき出し、清掃する、小さなひとつひとつの作業が、困難の中にあってもなお、希望をもって歩んで頂きたいとの祈りと共に行われています。

能登半島地震で被災した教会、また地域を覚えてのお祈りとご支援に深く感謝をいたします。主の御心がなされますように。主にあって。

（内城　愛報）

教団HPでは、毎月メッセージ動画（約10分）を配信しています

8月
▶荒井偉作牧師
（名取教会）

9月
▶田中　真牧師
（秋田高陽教会）

是非ご視聴ください。
尚、HPにはテキストメッセージもあります。

▼宣教研究所委員会▲

「宣教の未来Ⅲ」執筆候補者を選定

6月30日にオンラインで第2回宣教研究所委員会が行われた。

主に話し合われたのは、「協働」をテーマにした『宣教の未来Ⅲ』の論文集に関することであった。今回は基調論文を芳賀力氏（東神大名誉教授）に依頼しており、各応答論文（4編を想定）では基調論文に言及してもらうことによって、論集全体での一体性を図りたいと願っている。

すでに基調論文の骨子が委員会に届いており、感想を共有した上で、応答論文の執筆候補者の選定に入った。10名程度の候補者があがり、全体的なバランスを勘案しつつ、次回委員会（9月）までに交渉を進めることとなった。2026年10月の刊行を目指す。

なお「教会の一体性」をテーマにした『宣教の未来Ⅱ』については、本年8月の刊行に向けて準備が進んでいる。各教会に配布されることになる。

また、以前に出版された『信仰の手引き』が品切れとなっており、内容に手を加えない形での再版とするかどうかを含め、委員会で今後検討を行う。

（上田　彰報）

教団インスタグラムへの差別書き込みについて報告

毎年7月第2日曜を「部落解放祈りの日」とし各教会・伝道所で覚えていただいている。それに先立ち、部落解放センターは2025年6月30日（月）名古屋新生教会において部落解放センター主催「部落解放祈りの日」礼拝を開催した。例年、教団HP・Instagram等でも「部落解放祈りの日」礼拝を呼びかけている。そこへ部落差別や特定の県を揶揄する差別書き込みがあった。怒りと悲しみに耐えない。この現実を見据えなければならない。部落差別は現存する。わたしたちが部落差別の完全撤廃を願い祈り続けて44年、水平社宣言から100年以上経った今も、部落差別が再生産されている。私たちはこれからも祈りと行動を続けていく。これ以上、差別を生まないためにも日本基督教団は差別を許さない。皆で共に祈り、声を上げていこう

部落解放センター常任運営委員会

確認された「差別書き込み」は事務局によって直ちに削除されました。Instagramは差別者を特定することは難しいため、書き込んだ人が教団Instagramをフォローしていることを確認した上で、引き続き教団のInstagramを見ると考え「許さない」とのメッセージを掲載しています。今後、必要に応じて管理者（Meta社）にも通報の可能性もあります。

差別書き込みや投稿は犯罪です。法務省など公的相談窓口もあります。礼拝・牧会の現場やインターネットを活用した宣教において、差別の可能性に気づかれた時は部落解放センターに相談してください。また教会や学校等で、このような書き込みによる差別事件が発生した場合は、スクリーンショットを撮るなど画像を証拠として残し、即座に部落解放センターへ連絡をお願いいたします。

【部落解放センター　blc@nyc.odn.ne.jp｜T 072-875-8470｜F 072-875-8471】

▼教師養成制度検討委員会▲

関係神学校で「教師論」作成の経緯説明

第42総会期第13回常議員会（2024年10月28日開催）において、議長から提案された「教規から導き出される『日本基督教団の教師論』が承認可決されたのを受けて、同教師論の作成に当たった教師養成制度検討委員会は、日本基督教団関係神学校を訪問して、教師論作成の経緯説明と懇談の時をもった。訪問日程は以下の通り。

◎5月20日、東京神学大学（委員5名と幹事）。

◎6月10日、関西学院大学神学部・同志社大学神学部（委員4名と幹事）。

◎6月30日、東京聖書学校（委員4名と幹事）・日本聖書神学校（委員5名と幹事）。

農村伝道神学校は日程の調整がつかず、まだ訪問できていないが、いずれの神学校も好意的に受けいれてくださり、とても有意義な懇談ができたことを感謝したい。

まず雲然俊美教団総会議長による挨拶と祈祷をもって開会し、相互の自己紹介に続いて、菅原力委員長が経緯説明と挨拶を行った。東野尚志書記から15頁にわたる「教師論」の概要について簡単に説明をした後、質疑応答と自由な懇談を行った。

神学校側からは、日本基督教団の教師像について、神学生の間から学ぶ機会があってよいのではないか、今後、この教師論を教団の中でどのように用いていくのか、等の意見や問いかけがあった。また今後、教師が少なくなり、兼務や兼牧が増えていく状況を踏まえながら、未来に向かっての展望を語って欲しい、現場で多様な働きを求められて戸惑っている教師たちへの導きや励ましになる言葉が欲しい、等の要望もあった。

教団の一体性の要となる信仰告白と教憲・教規に基づく教師論を共通の言語として土台にしながら、教師を養成する神学校と教師を立てる教団の相互理解と協力をさらに深めていきたいと願う。

（東野尚志報）

『季刊 教師の友』休刊とホームページ開設のお知らせ

日本キリスト教団出版局

主の御名を賛美いたします。

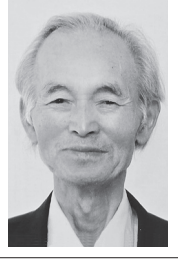
日本キリスト教団出版局は、『季刊 教師の友』を2025年11月11日発行の2026年1,2,3月号をもって休刊することにいたしました。これまでのご愛読に感謝しますとともに、休刊の運びとなりましたことを心よりおわびいたします。

『教師の友』は月刊誌としてアジア・太平洋戦争中の1942年1月号からはじまり、2002年度からは季刊に移行し、CSスタッフに必要なさまざまな情報を提供してまいりました。しかし、少子化に伴う販売部数減および製作費の高騰を受け、近年は収益を上げられずにおりました。販売価格を上げての継続も考えたものの、根本的な解決にはならないと判断し、休刊を決定した次第です。

教会教育に関する情報は、新たに立ち上げるホームページで発信を続けます。教育委員会が作成する「教会教育プログラムカレンダー」に基づく教案の情報を中心に、CSにつながるみなさまと共につくるホームページにします。ぜひみなさまのご意見・ご要望を、下記二次元コードの先にあるアンケートからお寄せください。ホームページの開設は2025年末の予定です。

ホームページの年間購読料は、現在の『教師の友』の年間購読料よりも低くします。教会で購読をお申し込みいただければ、所属する教会員のどなたでもご覧いただけます。また、ご希望の教会には内容を印刷した小冊子をお届けします。詳細につきましては決まり次第、日本基督教団および出版局のホームページでご案内します。日本基督教団の教会・伝道所に10月末にお届けする、教育委員会の全国発送に同封するご案内でもご確認いただけます。もちろん、次号『季刊　教師の友』2026年1,2,3月号の誌面でも、刊行時点の情報をお知らせします。この件のお問い合わせは、出版局ホームページのお問い合わせフォームへお寄せください。これからも共にCSのはたらきを続けられますよう願いつつ。

事務局報



綱嶋敏光（無任所教師）

24年9月12日逝去、84歳。岡山県生まれ。79年農村伝道神学校卒業、83年より87年まで油木教会を牧会後、アメリカのザ・レムナント・ミッション・チャーチの協力牧師。遺族は子・綱嶋直美さん。

植西光雄（隠退教師）

25年6月22日逝去、88歳。北海道生まれ。64年農村伝道神学校卒業、同年より北見クリスチャン生活学園に務め、北立川伝道所、袖ケ浦ともしび教会、志津伝道所（ユーカリが丘教会）、八街西伝道所を牧会し、22年隠退。遺族は妻・植西京子さん。

山内　眞（無任所教師）

25年7月6日逝去、84歳。大阪府生まれ。67年東京神学大学大学院修了、同年より吉祥寺、鎌倉雪ノ下教会を牧会し、東京神学大学に09年まで務める。遺族は妻・Anna Yamauchiさん。

補教師登録

久保彩奈、大森意索、堀尾　隆、石島織恵（2025・6・29受允）

教師異動

早稲田　就（担）堀尾　隆
千代田　就（担）大森意索
巣鴨ときわ
　就（担）堀尾　隆
エパタ　就（担）石島織恵
桜美林　辞（担）今村愛喜
和泉短期大学
　辞（教）和寺悠佳
〃　就（教）今村愛喜
青山学院大学
　就（教）和寺悠佳
活水中学高校
　辞（教）三河悠希子
〃　就（教）北見さとみ
フェリス女学院中学高校
　就（教）三河悠希子
木更津　辞（主）倉橋康夫
〃　就（代）池田多実男
与勝　辞（主）林　利行
平良川　辞（代）林　利行
〃　就（主）林　利行
江別　辞（代）小林克哉
〃　就（主）田村敏紀
瀬戸キリスト
　辞（担）竹村眞知子
徳之島　辞（担）山口政隆

教師隠退

倉橋康夫
竹村眞知子

お詫び・訂正

教団新報5035号3面「宣教委員会報告」本文中、「委員長を須賀工委員とする」を「委員長を堀川樹委員とする」に、お詫びして訂正いたします。

伝道報告

伝道のともしび

TOMOSHIBI

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。…イエスは言われた。「あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」
ルカによる福音書第10章17節～20節

伝道推進室より応援した教会・伝道所

祈りに生きる　小さな希望の星

酒田暁星教会牧師　**関戸　直子**

山形県酒田市という山形県の最北にある教会で、県内を流れる豊かな最上川が日本海に流れ込む河口に位置しています。酒田は江戸～明治時代にかけて、庄内平野でとれる豊富な米を「北前船」で、江戸や大阪など日本全国に千石船にのせて運ぶことで栄えた都市でありました。NHKの朝ドラ「おしん」の舞台になったところです。

戦後、塩沢正司牧師の家庭集会から宣教がはじまり、その後、現在の場所に教会が建ちました。昔の地区新聞を読みましたら、塩沢牧師はここを「子どもたちが集まる学校」にしたかったようです。ですから教会のつくりも、いわゆる教会らしい設計というよりも、子どもたちが入ってきやすい敷居の低さとなっており、学校教室に似た形状になっています。

酒田暁星教会はホーリネスの群に属し、信徒2～3名という小さな教会でありますが、長年地域に根付いた教会として、地元からの信用は厚く、ご近所の方々も理解と温かいまなざしをもって受け入れてくださっていることは、大変ありがたく感謝しています。現在は歴代7人目の教師として私が遣わされ、4年目になりました。

活動としては、主日礼拝が日曜日午前10時半から。第3日曜日は、「歓迎礼拝」として、教会に来たことのない方にわかりやすく、親しみやすい聖書の話をしています。礼拝後はランチを囲み、みんなでゲームなどをして楽しい時間をもっています。第4日曜日は、聖書研究があり、その他、毎朝電話でデボーションをして牧師と信徒が互いに祈りあっています。

宣教の業として、自治会の公園掃除や、自治会婦人との旅行、総会などに積極的に参加しています。できるだけ地域に溶け込み、社会貢献していくことも心がけています。町内自治会の主催する100歳体操と輪投げの会に参加しますと、たくさんのお年寄りと仲良くなり、親しみをもって接してくれます。

また地元の小学生の放課後の居場所として「あそびの森」を開催。子どもたちが毎週5～6人学校から帰って、走ってやってきてくれます。内容としては、みんなでゲームをして遊んだり、ギターで賛美したり、イエス様のお話をきいて、手作りおやつを食べて帰る、を繰り返しています。未信者の親御さんにも喜ばれています。

他にも「カウンセリングセミナー」「子育てカフェ」「韓国語教室」など、人々のいろんなニーズにこたえるべく、活動しています。

今後の展望としては、小さな子供たちがおもちゃや絵本などを貸出しできる「おもちゃ図書館」。地域の一人で暮らす方々が気楽に学べる「教養大学」などを企画中。いろんな集まりをとおして、イエス様の親しみやすさ、愛のぬくもりをみなさんの生活の中にお伝えできたらと願っています。

教会外観と聖餐式

《教誨師会研修会》

「医療刑務所の現場にて」

7月14・15日、軽井沢南教会において、日本基督教団教誨師会研修会・教区代表者会が参加者38名で開催された。

一日目は、「医療刑務所の現場にて」という主題で、岸本光子教誨師（大阪暁明館病院伝道所牧師・西日本成人矯正医療センター教誨師）と浦上結慈教誨師（宝塚教会牧師、播磨社会復帰促進センター教誨師・元大阪医療刑務所）から講演を聞いた。医療刑務所（現在の名称は「成人矯正医療センター」）は、専門的な医療処置を要する被収容者を収容する矯正施設で、中でも教誨師として終末期医療を受けている被収容者との関わりが他の矯正施設とは異なる特徴といえる。岸本教誨師は、医療刑務所の説明をし、さらに具体的なケースを紹介しながら教誨師の働きの大きさを伝えてくれた。浦上教誨師は、大阪刑務所から医療刑務所が設立時、教誨師として委嘱された時の経験を話した。また、民放の特集として医療刑務所が取り上げられ浦上先生自身の働きの様子が映されている録画ビデオを見せてもらった。罪を背負った苦悩と、その人生の終わりを迎えている方との関わりの中で、教誨師が寄り添い、キリストが与えてくださった罪の赦しの福音を伝えようとしているお二人の貴い働きを共に心に留めることができた。さらに、一日目は、講演後、教区代表者会を行い、各教区での教誨師の働きを共有した。

二日目は、加藤幹夫教誨師（阿漕教会牧師・三重刑務所教誨師）が教誨師としての歩みから奨励をし、その後、分団に分かれて、それぞれの働きと課題を共有した。

この教誨師会は、日本基督教団伝道委員会と皆さまの献金によって活動が支えられています。教誨師の働きを祈りと献金を通して覚えていただけると幸いです。

（加藤幹夫報）

ひとときの人

良い時に良いものを

阿部（あべ）　宣子（のぶこ）さん

父が尾張一宮教会で牧会をしているときにこの世に生を受けた。以後、父親の転任と共に、蕃山町教会、自由ヶ丘教会へと教会生活の場が移っていく。自分の意思とは無関係に、教会だけが変わっていくという教会歴だ。中3で信仰告白をするが、牧師の子らしく、特段きっかけになる大きな出来事があったわけではなく、それくらいになれば信仰告白はするものだと、そんな思いだったと振り返る。

現在は、生まれて初めて父親が牧していない教会で教会生活を送っている。父親が去った教会でそのまま教会生活を送ることも出来たが、前任牧師の血縁者がそのまま教会に在籍し続けることの是非を考え、初めて、どこの教会での教会生活が良いのかと、神に問う経験をした。

教会ではもちろんのこと、それ以外に、有志団体が主催する中高生、青年の集まりで信仰が養われた。それらの集まりでの出会いは現在も続いており、信仰生活の一つのモチベーションにもなっている。やはり、教会を越えた同世代の信仰の友の存在はありがたいと語る。

教会では昨年度より、長老の務めも担っている。まだまだ足らない面だらけなのは百も承知。学生時代から続けている教会学校の教師の務めと合わせて、これからの教会がどうなっていくのか、神が何を求めておられるのかを思いつつ、何より、一礼拝者として整えられることが第一であると言う。

兄の献身に伴い、いつの間にか牧師の娘であるだけでなく、牧師の妹になっている。牧師への献身の志を問われると、「信徒として献身する者がいなくなったらまずいですよね」との答えが。神は良い時に良いものをお与えくださる、そんな言葉を胸に、一信徒として、信仰の歩みは続いていく。

高輪教会員

へば、なんとす？

6月23～25日、教団新任教師オリエンテーションに参加した。今年度新たに遣わされた教師たちと共に、学びと交わりの時をもち、新任教師の皆さんが、それぞれの働きに真摯に取り組んでいる姿に励まされた。

遣わされた教会や学校は違っており、その働きの場での苦労も違う。けれども、共通していることは、「ここから始まる」ということである。

今回も、「教会員が少ない」、「青年がいない」、「説教の準備が大変だ」、「行事や集会の準備に追われている」など、様々な悩みを抱え、苦労している声を聴いた。しかし、教会や学校での福音伝道の働きは、今、出会っている一人ひとりとの関わりから始まっている。

大勢の群衆を前に、「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」と言った弟子たちに、主イエスは、「それをここに持って来なさい」と言われた（マタイ14・17～18）。「これしかない」のではなく、「これがある」のだ。

秋田出身で、秋田に遣わされている者として、常々、「最強の秋田弁」であると思っている言葉は、「へば（これが現実であり、現状である）、なんとす（それではどうするのか）？」である。福音伝道の働きは、今与えられている場と人との関わりに懸命に取り組むことから始まる。

新任教師の皆さんの働きを覚えて祈っている。

（教団総会議長　雲然俊美）